

発行：函館西部地区バル街実行委員会 〒040-0003 函館市松陰町 1-4 レストランバスク内



16年の年月が過ぎた

函館西部地区バル街実行委員会 代表 深谷 宏治

2004年のバル街初開催から16年の年月が流れました。仲間とともに催しを創りあげ、参加店の皆さんと一緒にお客さんを持ってなし、多くファンの方々に支えられ、今日まで続けてこられたことを、まずもって実行委員会一同、心より御礼申し上げます。さて、今般の新型コロナウイルスの流行に際し、私たちが熟慮のうえ今年の春秋2回の開催を中止するという判断に至りました。我々自身が楽しみを失った無念さとともに、何より心待ちにされていた方々には本当に申し訳ないという気持ちでいっぱいです。

こうしたなか、これまでのバル街を振り返り、次回に向けての意気込みもお伝えしようということになり、13年ぶりにニュースレターを発行します。

この間、バル街をきっかけに私たちの周りでは、いろいろな化学変化が起きました。まず全国各地から行政や商店街など、まちづくりに関わる人たちが、私たちのもとを訪ねて来てくれました。わが街でもバル街をやってみたくていい、バル街を体験し真剣に話を聞いてくれました。最初から期待があったわけではない

のですが、その種は各地で芽吹き、花開いて、さらにその種がどんどん広がっていきました。最盛期には500ものバル街イベントが全国で開催され、昨年でも200を超えるものが継続されています。このうちのいくつかとは色濃いお付き合いも始まりました。

2017年には、開催手法を無償で提供する仕組み“オープンソース”でイベントが各地で定着したことが評価され「グッドデザイン賞 特別賞（地域づくり）」を受賞し、東京・赤坂のステージでバル街を紹介する機会を得ました。また昨秋には「サントリー地域文化賞」をいただきました。賞の審査委員会は、バル街の楽しさを「街角の社交」と表現され、参加者、参加店そして私たち主催者、皆それぞれが街角で楽

しみを分かち合っていることを認めてもらい、「ヤッター！」という気持ちになり、仲間たちとこれを喜び合いました。

来春には、もちろんバル街の再開を予定しています。9回目となる世界料理学会との併催を計画し、開催の準備を進めます。コロナが落ち着くことを願い、また皆さんにお会いできることを楽しみにしています！

（「レストランバスク」店主）



▲ 2019年9月、東京にて、第41回サントリー地域文化賞の授与式

街とbar街

函館西部地区バル街実行委員会 村岡 武司

函館はバル街発祥の地であり聖地とも認知されている。実行委員会代表、深谷宏治さんの慧眼であり、先行者利益とも言えるが、もうひとつ見過ごせないのは、函館という都市の特殊な地形や成り立ちである。津軽海峡に突出したその先端に函館山が聳えるが、幸運にも最初の「都市のタネ」が発芽したのは、この函館山の山麓だった。市役所都市建設部では西部地区と呼称していたが、それを「旧市街地」と読み替えたのも深谷さんである。

函館の先住者は縄文人だが、それはそれとして、旧函館都市圏には近代より現代に至る都心変遷の痕跡が明瞭に残っている。時代とともに都心が移動し、それはまた人類のエネルギー変遷史とも対応している。それというのも、ここは大火が多発した街であり、明治から昭和初期に起きた数度の火事は、東川町や住吉町から発して陸繋島の回廊部分を燃やす大火となり、結果として都心の移動が進んだ。幕末から現代に至

る時代の流れが、山麓から駅前大門地区、そして五稜郭本町地区、湯川や赤川、石川町方面へ順次東進・北進し、記憶もそれぞれ深く残る事となった。

最初、山麓一帯に人々の営みの集積ができた。つまり都市が発芽し、江戸幕府直轄地として人や物や文化が船で運ばれたが、それは風を動力とする帆船だった。次いで小樽との間に鉄道が敷かれて大門地区に駅舎が建設され、青森との間に連絡船が就航するが、その頃の鉄道や船の燃料は石炭だった。やがて石油の時代が到来し、モーターゼーションによって自動車道路や空港が整備された。ついでに言えば海峡の向こう側には建設途中の大間原発が見える。つまりここは、風力から石炭を経て石油、原子力へ向かう経済的合理主義が視覚化できる場所なのだ。それは開墾した田畑を新たに掘り起こし、さらに埋め立てもしながら、街を郊外へと滲出した様相とぴったり重なる。

我々のバル街は旧市街地が舞台だ。聖地としての高評価も、ひとつはこの舞台の魅力だろう。今や石炭の町や石油の町に居住する多くの市民にとり「風の街」は故郷のように懐かしく、非日常の舞台に感じられるだろう。自然を切り払って都市化したのは函館だけではなく、全ての都市がそうである。ただ、他都市ではスクラップアンドビルドを重ねた結果、混沌となり時代の趨勢を読み取るのが難しくなっただけだ。

都市は消費と廃棄を行う場である。経済活性化と言ったところで、厚い札束がそのまま人の胃袋に収まるわけではない。こうしてコロナ禍に遭遇して思うことは「飲み、食べ、語りあう」のが人間であり、これこそがバル街だということだ。空気や水や食べ物を産出する郊外との関係をより深めてこそこのバル街、それこそが持続可能社会への道だ。

(「ギャラリー村岡」店主)

地域イベントに必要なこと

函館西部地区バル街実行委員会 田村 昌弘

私が実行委員に加わったのは2007年。「はるバル、ようこそ。」というキャッチコピーとともに、港を眺める紳士淑女の古写真をモチーフにした第7回の頃です。

以降、年に2度ずつの開催を裏方として支えつつ、自らも楽しみながら、地域にふさわしいイベントの姿を仲間とともに模索してきた14年でもありました。この間、全国からの注目が集まり、いくつかの顕彰もいただくこととなったバル街ですが、開催当初から変わらないことは「手作り」であり「身の丈」を大事にしていることだと感じています。

コロナ禍のいま、再び歩み出すためのヒントを探そうと、これまでの裏方の経験から、地域イベントに必要な要素について少し整理してみました。

■ 会えることの楽しみ

バル街の楽しみといえば、まず一番目に挙げたいのが、ここに来ればいろいろな人に一度に会えることです。多くの皆さんにとって共通の感覚だと思います。裏方で関わる私たちにとっては、多くの人たちが会いに来てくれる機会であることが、開催の大きな動機付けにもなっ

ています。そして、これにはもちろん「函館の旧市街地」というステージのチカラが大きく作用しているのは言うまでもありません。

■ 担い手もまたよし

バル街はよく「三方よし」のイベントと評されます。「売り手よし、買い手よし、世間よし」という近江商人の哲学とされる言葉ですが、参加店の売上げ、参加者の満足、そして地域の賑わいという面ではそのとおりです。しかし、もうひとつ大事なことがあります。私たち実行委員会は「売り手」というよりもむしろ「担い手」。バル街では、私たち自身がこのイベントを一番楽しもう、といつも意気込んでいます。友人たちの楽しむ姿に触れること、これこそが私たちの楽しみです。つまり「担い手もまたよし」というわけです。実はこれが継続の最大の秘訣でもあります。担い手が楽しみや喜びを享受できてこそ、そこに新しい発想や展開が生まれ、周りが活気づき、売り手、買い手、そして地域へもよい効果をもたらすのです。担い手自身が楽しむことは地域づくりに欠かせないことであり、これこそ

が多くの地域イベントの成否の分かれ目であるとも感じています。

■ 繋がりのチカラ

また、バル街を長く続けてきて、他の地域で同じ想いを持つ人々に出会い、その人たちとの繋がりが私たちを後押ししてくれています。関西地方でのバル街の火付け役にもなった兵庫県伊丹市のほか、愛知県刈谷市、新潟県長岡市など、思いがけない遠方の人たちとの親交が生まれました。なかでも互いに大きな刺激を受けあっているのは、津軽海峡を挟んだ近隣の街々との交流です。弘前バル街は18回、あおりバル街は15回の開催を数え、そのほとんどに私たちも出店などで関わってきました。さらに一昨年から江差町での開催が始まり、楽しみが増えました。他との繋がりによって、これまで忘れていた自分の地域の良さを見直すことが数々あります。まさに「繋がりのチカラ」といえるものです。

コロナの収束を願いつつ、バル街での楽しい体験を振り返りながら、次に向けた一歩を踏み出していきたいものです。

(オフィス「オリゾンテ」代表)

研究ノート 参加店の「あゆみ」：参加回数から見てくること

福井県立大学経済学部 准教授 松下 元則

今から12年前、当時、函館大学に勤めていた筆者は、函館西部地区（以下、西部地区）の散策と「美味しいお店探し」をかねて、函館西部地区バル街（以下、バル街）に連れ合いと参加した。その時の体験がきっかけで、10年以上、バル街の研究を続けている。

このエッセイでは、第1回（2004年）から第32回（2019年）までのバル街マップに基づいて、バル街に参加した飲食店（以下、参加店）の「あゆみ」の一端を紹介する。今回、注目するのは、各参加店のバル街への参加回数である。参加回数に注目する理由は、各参加店の「あゆみ」を示す重要な指標だからである。参加回数の優劣を論じるためではない。なお、東日本大震災の影響で開催中止になった第15回については、バル街マップが刷り上がり、参加店も確定していたので、参加したものとして話を進める。

2004年2月16日に開催された、第1回の参加店は25軒だった。そのなかで第32回まで全ての回に参加しているのは、

「和ダイニング井井」と「Café TUTU」、「洋風居酒屋南部坂」、「ザ・ベリー・ベリー・ビースト」、「茶店バーやまじょう」の5軒である。第2回から全て参加しているのは「MOSSTREES」、第3回から全て参加しているのは「五島軒（本店&雪河亭）」である。「キッチンバー ボーダー」と「やさいばーみるや」は、一部不参加の回もあるが、30回以上、参加している。

第1回～第32回のバル街マップによると、参加回数が「30回以上」の参加店は9軒、「20～29回」の参加店は26軒、「10～19回」の参加店は44軒であった。10回以上参加した79軒のうち、70軒は西部地区の参加店であった。西部地区の参加店の4割弱が、10回以上、参加してきたのである。これらの数字は、「西部地区の参加店の継続的な参加が、バル街を支えてきた」ことを物語っている。

バル街が参加者に提供するサービスの大部分は、参加店で提供されている。そのため参加店の継続的な参加は、バル街と参加者に様々なメリットをもたらして

きた。例えば、何度も参加しているリピーターのなかには、「毎回、訪れるのを楽しみにしている店」や「バル街といえば、あの店」というように、お気に入りの参加店が決まっている人も少なくない。このような人にとっては、「バル街に参加すること＝お気に入りの参加店を訪れること」である。もしも、お気に入りの参加店が閉店あるいは参加を中止すれば、リピーターの「バル街に参加したい」という意欲は低下するだろう。バル街で西部地区を飲み歩く楽しみは、魅力的な参加店があってこそ成立する。

筆者にも、お気に入りの参加店が何軒もある。最近では、お気に入りの参加店が増えて、1回では全てをまわりきれない、という贅沢な悩みを抱えている。新型コロナウイルスが1日でも早く終息して、この贅沢な悩みが今後も続くことを、バル街のリピーターの1人として切に願っている。

Voice ものが「こと」になる一日 人生の学び舎「荘」プロジェクト 代表 下沢 杏奈

私は今、西部地区の3軒の古民家を改装しながら、人生の学び舎「荘」というシェアハウスを運営している。学生から社会人1、2年目の年代が集まり、自分自身と向き合い、実践し表現する中で、自分の夢を追っている。

「荘」一軒目であるわらじ荘は弁天町にある旧野口梅吉商店という建物。住み始

めたのは2019年の秋。その前まではイベント時のみ使われていた。私が始めてこの建物に足を踏み入れたのは2017年の秋。渡島総合振興局の木づかいプロジェクトで正面の格子を塗り直したり、道南杉で2階の床を貼るワークショップを行なった時だ。

その後、2018年の秋にはバル街の会場

として使用された。札幌の学生が道南杉を使って作った家具で空間を演出し、函館の大谷短期大生が作ったピンチョスト、ちょっとしたお酒を提供。そこに学生から一般の方が音楽を奏でている、そんな人々のクリエイティブが溢れる空間がこの家に確かに存在していた。私はそのライブでハーモニカを吹きながら、この空間に感動していた。

バル街という一日は、人々の表現物がぶつかりあい、融合しあい、そして豊かな営みが自然と生み出されている。食や家具など、人々がつくったものが一日を通して「こと」になる。その「こと」は人々の心を虜にし、人々を幸せにすることに繋がるかもしれない。バル街という一日は、人がつくりあげたものを「こと」に転換するのだ。

私はバル街のような光景がもっと日常的に融合し合う場を作りたくて、ここ西部地区で「荘」という人生の学び舎を始めた。ここに住んで初めてのバル街開催を、じらされているからこそ、いつかいつかと楽しみが積み重なっている。



▲ わらじ荘の前で、プロジェクトのメンバーとともに（前列右から4番目が筆者）

Voice 西部地区からの旅立ち 料理店「パザールバザール」店主 国立 大喜

函館・西部地区の元町にて生まれる。1歳になる前に杉並町に越したので、ほぼ生まれたというだけで西部地区への思い入れはないに等しい。その後の人生で、西部地区から程遠い地を渡り歩き、函館から離れたままの人生が続く。故郷函館は、自分の人生において、十代までを過ごした少年時代に過ぎなかった。

しかし人生は不思議なもので、強く望んだと言うわけでもないが自分の人生の区切りとして一度函館に戻る。30歳。一人の知人すらいらない函館ライフが始まる。まずは「はこだてイルミネーション映画祭」のボランティアになりたいとその年の冬の映画祭の準備会議に参加した。それが自分の人生において初めての西部地区との出会いだった。冬の西部地区はうっすら雪化粧でとても美しかった。

数年の時を経て、末広町二十間坂の物件と出会う。オランダロッテルダムにあった「Pazar」という中東料理のお店に憧れを持って自分の中の店イメージが、その物件に出会った瞬間に景色として広がった。茂辺地にあった祖母の旧家解体の廃材を主に使って友人たちと数ヶ月かけて内装を作り上げた。お店作りに熱中するあまりお店のメニューすらはっきり確定しないままオープン直前を迎えた。バタバタしたままお店は動き出し、営業形態も変化させながら10年夢中で営業し

てきた。気づけば道南に多くの知人友人は増え、嫁と二人だった家族も四人に増えていた。縁あってお店を始める前から知り合っていた生産者の方々と、お店を通じて縁を深めることができた。

西部地区でお店をしていると、人の繋がりがあつたかいとを感じる。小さなお店を小さいながら力強く続ける方々は芯が強くそして優しい人が多く、見えない糸でゆるく繋がってるような感覚があった。春と秋に開かれるバル街はそんな横の連帯感を一層強く感じるお祭りだと思う。今年は開催がなかったが、オープンから欠かさず参加させていただいた。坂道の外にテントを張り、牛肉回転焼きのドネルケバブを焼くと匂いも流れるのか、多くの方が坂道に並んでくれ、賑やかにお酒を片手に楽しんでいただいた。

2020年、以前から計画していたもっと広い空間での店作りに挑みたく、末広町店舗を離れることを決めた。函館は旅が似合う街である。自分も旅人の宿木のような場所でありたいと思っていた。地元の方にも旅気分を感じてもらいたかったし、旅の方とは交流する市場（バザール）のような場所であろうと思ってきた。お客様にとっても旅の時間であったように、今思うと自分の西部地区時間も旅の時間だったようだ。旅は続き、終わりはない。どこまでも旅しながら、今という時間を

味わい尽くして行きたい。そう思って、旅立ちます。ありがとう西部地区の時間、西部地区の愛すべき人たち。



<略歴>

函館市生まれ。函館市西部地区で2010年からトルコ料理店パザールバザールを営む。2020年末末広町店を閉店、由仁町に移店準備中。44歳。

編集後記

次回 bar33 は、2021.4.18 (日) の開催を予定しています。

但し、新型コロナウイルスの感染状況等を考慮したうえで、2021年1月下旬に開催の最終判断をいたします。

○「函館西部地区バル街」の7回目を迎えた2007年の春に「バル街からの手紙」と題したパンフレットを出しました。実行委員の村岡さんから「3年たった、このイベントはどういうものなのだろうか一度振り返ってみよう」という提案があり、参加店主、お客からの文章も掲載したものでした。それから13年。今年2020年に一度もバル街を開催できないことで「ちょっと深呼吸」という気持ちが起こり、第2号にあたるものを発行します。

○開店からずっとバル街に参加してくれた「PazarBazar」さんが西部地区を離れて空知で新しい展開をされる。一方、学

生の若い世代が西部地区の古民家を新しいスタイルで利用し始めた「わらじ荘」さん。両代表から文章をいただくことができました。バル街を研究テーマにされている松下先生からは、参加店の継続状況の中間報告をいただきました。

○村岡委員は函館の歴史とバル街の結節点を考察、田村委員は地域イベントのためのバネを探っています。

○巻頭の深谷代表の文章にあるように、来年春には第33回バル街を開催したいと実行委員会では話し合っています。いわゆる「コロナ禍」の状況次第であること前提にせざるを得ませんが、開催判

断は1月後半、開催日は4月18日の日曜日、翌日から2日間、第9回世界料理学会も併催する予定です。

函館西部地区バル街実行委員会 加納諄治

■参加店の皆さんへ

バル街に関わる思いや思い出などを寄せてください。600字以内、2021年1月20日までに。Eメールは kanoh@ms6.ncv.ne.jp(加納) または m_tamura@fk9.so-net.ne.jp(田村) に、Faxの場合は0138-27-4190(加納)まで。